



<http://www.music-communication.com>



神戸女学院大学

TCM

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

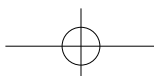
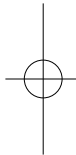
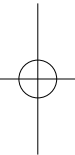
音大連携による教育イノベーション

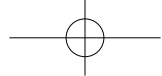
音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

令和元年(平成31年)度 活動報告書



このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。





音大連携による教育イノベーション：音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

令和元年（平成 31 年）度 活動報告書

目 次

はじめに	2
教員・スタッフ紹介・令和元年（平成 31 年）度活動概要	3
令和元年（平成 31 年）度「ミュージック・コミュニケーション講座」	
1. 第 1 回 コンサートを活性化する・・・オーケストラと聴衆を繋ぐ力	4
2. 第 2 回 踊る心身のワークショップ	6
3. 第 3 回 裏声歌手が語るファルセットの世界	8
4. 第 4 回 ほぐす・つながる・つくる！カラダを奏でるコミュニケーションと表現 ～音と動きは双子のきょうだい!?～	10
5. 第 5 回 音楽ワークショップに役立つ基礎知識～コード、モード、リズムで遊ぶ～	12
6. 第 6 回 神戸女学院大学 実習報告会	14
7. 第 7 回 即興はこわくない！～自由な発想とカンタンな方略で音楽を膨らませる秘訣～	15
8. 第 8 回 コンサート企画の表と裏	17
9. 第 9 回 東京音楽大学 実習報告会	19
10. 第 10 回 総括	20
各大学実習報告	
1. 東京音楽大学 区民ひろば南池袋 音楽ワークショップ 第 10 回みないけキッズアーティスト「音大生と一緒に音楽を作ろう！」	22
2. 東京音楽大学 「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに音楽づくりワークショップ 「イギリスの先生たちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう」	24
3. 神戸女学院大学 「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第 10 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」	28
4. 東京音楽大学 大宮東小学校 音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」	32
5. 東京音楽大学 西武池袋本店 音楽づくり体験ワークショップ「誰でもみんなアーティスト」	33
おわりに	36



はじめに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、平成の10年間を経て、改元と共に11年目となりました。

今年度の2大学共通講座では、交響楽団やアートマネジメント、舞踊、身体と音楽のワークショップ、即興演奏等、さまざまな分野で活躍されている講師をお迎えして、座学あるいは実践によるご指導をいただきました。東京音楽大学では今年度からキャンパスが二つに分かれたため、講座を実施していない池袋キャンパスに主に通っている1年生の受講が危ぶまれましたが、移動をものともせず、1年生も積極的に受講してくれたのはうれしい限りです。また今年度は、すでに何度か講師をお願いしてきたギルドホール音楽院出身のデッタとナターシャの二人に、3年ぶりに特別セミナーの講師をお願いしました。それぞれに家庭を持ちながらも、さらに幅広い音楽性で包容力豊かなワークショップを展開してくださる様子に、月日の流れと同時に本プロジェクトの成熟をも感じることができました。

今年度、東京音楽大学では西武池袋本店との共催により、豊島区の小学生を対象に定期的な音楽ワークショップを開く機会を得ることもできました。本講座で学んだ学生と卒業生がそのスキルを社会で生かしていくことができるように、またその意義を社会に発信できるように、こうした連携をさらに継続・発展させていきたいと思えます。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。1年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々に広くご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

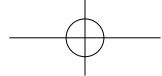
2020（令和2）年3月

武石みどり（東京音楽大学・教授）

*開講科目名

ミュージック・コミュニケーション講座 A・B（東京音楽大学）

ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）



教員・スタッフ（令和2年3月現在）

東京音楽大学	武石 みどり 磯野 恵美 坂本 夏樹	東京音楽大学音楽学部	教授 連携センタースタッフ 連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実 遠藤 紀子 荒木 この美	神戸女学院大学音楽学部	教授 連携ルームスタッフ 連携ルームスタッフ

令和元年（平成31年）度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれもインターネット・テレビ会議システムにより、2大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成31年4月19日（金）	発信校：東京音楽大学
第1回：平成31年4月26日（金）	発信校：神戸女学院大学
第2回：令和元年5月10日（金）	発信校：神戸女学院大学
第3回：令和元年6月14日（金）	発信校：神戸女学院大学
第4回：令和元年6月28日（金）	発信校：東京音楽大学
第5回：令和元年10月11日（金）	発信校：東京音楽大学
第6回：令和元年11月1日（金）	発信校：神戸女学院大学
第7回：令和元年11月15日（金）	発信校：東京音楽大学
第8回：令和元年11月29日（金）	発信校：神戸女学院大学
第9回：令和元年12月13日（金）	発信校：東京音楽大学
第10回：令和2年1月17日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

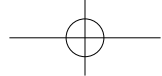
令和元年7月31日 於：区民ひろば南池袋
第10回みないけキッズアーティスト「音大生と一緒に音楽をつくろう！」

令和元年9月12日（木）～15日（日） 於：東京音楽大学
「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに音楽づくりワークショップ
「イギリスの先生たちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう」

令和元年9月17日（火）～21日（土） 於：神戸女学院大学
「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに
第10回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

令和元年6月22日（土） 於：大宮市立大宮東小学校
音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」

令和元年5月～11月 第1土曜（計5回） 於：西武池袋本店
音楽づくり体験ワークショップ「誰でもみんなアーティスト」



令和元年(平成31年)度 第1回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第1回ミュージック・コミュニケーション講座 「コンサートを活活化する・・・オーケストラと聴衆を繋ぐ力」
講師	西濱 秀樹 (山形交響楽団協会専務理事兼事務局長)
実施日時	2019年4月26日(金) 14:00 ~ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第1回の講座は、山形交響楽団協会専務理事兼事務局長の西濱秀樹氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。</p> <p>西濱氏は関西学院大学社会学部を卒業し、1995年、楽団存続を訴えるシンポジウムでの発言をきっかけに関西フィルハーモニー管弦楽団に入社。2003年から2011年まで理事・事務局長を務め、楽団の法人化と黒字化を達成した。支援体制の構築、世界的音楽家オーギュスタン・デュメイの招聘など、同楽団発展の基礎を作った後、2011年8月から教育事業に携わった。2015年5月に山形交響楽団協会専務理事兼事務局長に就任したという経歴を持つ。コンサートでは司会も務め、クラシック・オーケストラを身近に感じてもらえる企画を展開している。</p> <p>中学生の時に演奏会に通い始め、海外のオーケストラを聴くにつれ、「音楽を仕事にしたい」という思いを持った。こうして現在に至るまでの20年間、コンサートをマネジメントする人間としての経験を、山形交響楽団の演奏実績を基に語る。</p> <p>マネジメントというのは演奏家の道を作ることであると言い、演奏家を電車、電車を走らせるためのレールを作る人間をマネジメントに例えながら、これを磨き続けることが必要であると主張した。</p> <p>何よりも重要なのは「子どもたちに向けたコンサート」である。自分たちでチケットを購入してやってくる大人とは違い、こちらから学校に出向いて演奏することは「子どもたちを育てる」という目的を持っている。ここでは一体感がカギとなる。例えば、地元山形の魅力をみせるために法被を着て演奏をすること、座っている子どもたちの間にある通路で演奏すること、時には一番後ろから前に歩きながら演奏することなどによって、子どもたちを引きつけ、一体感を生み出すことができる」と語った。</p> <p>山形市の人口は約25万人であるのに対し、ドイツでは3万人、5万人と小規模でもオペラハウスや市民オーケストラを持ち、社会に音楽が浸透している。ドイツにもできるのだから、山形にもできると積極的にマネジメントを行った結果、現在は楽団員45名で年間230回以上の演奏会を行っていると話した。</p> <p>最後に、「皆さん演奏家はこれからもっとやっていける、まだまだ価値がある」という言葉で学生を激励した。</p>

〈学生のこぼれ〉

・常に公演を聴いて下さる相手がどういう人なのかを考え、内容を変えることが大切だと感じました。西濱先生の場合、音楽を大学などで学んでいなくとも、音楽が好きだという思いが純粹に相手に届いていることがすばらしいと思いました。
(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

・自分は山形に6歳頃から高校の時までいたので、山響には大変お世話になったのですごく楽しみにしていました。やはり「道」をつくる人、そして「意思疎通」「背中を押す」など、マネジメントは演奏者に対しても、聴いてくださる方々や地域に対しても気を配る大変大事な仕事だったと改めて気づきました。本当に熱心でユニークで素敵な方

だと思いました。 (東京 / ピアノ / 1年)

- ・マネジメントの仕事の内容から、そこでの経験などを詳しく、端的に、面白く講義して下さり、さらにアート・マネジメントに興味をもてた気がします。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

- ・コンサートが大規模でなくとも、少人数に聴いてもらうとして、年齢や時代、演奏形態など、細部まで考えて構成したい。仲間とする場合はみんなで話し合ってやりたい。それができるような環境を作る。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

- ・とても勉強になる話ばかりで、マネジメントや経営している側からの意見や話が聞けたのはすごく貴重でした。企画をする時にどんなことを考えて決めているのか、「型」にはめずに常にお客さんの目線から見てどんなコンサートが楽しいのかを考えていくことの大切さがよくわかりました。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・仕事に対しての向き合い方、考え方がとても参考になりました。私はこれからどの仕事に就くかわかりませんが、自分たちのことだけを考えるのではなく相手側と一緒に物事を作っていきたいと思いました。それを作るために仲間一人ひとりに向き合っていけたらと思います。企画をする上でコーディネートの仕方は100公演あったら100通りあることを忘れないでいきたいです。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・もし、マネジメントをさせていただく機会がありましたら、音楽家の道をつくること、意思疎通をきちんとおこない音楽家の背中を押すことなどを心に留めておきたいです。子どもたちへのコンサートをする時は、自分たちの意見や感性を押し付けずに子どもの気持ちになってコンサートを作りたいと思います。楽器を振り上げての挨拶もやってみたいです。西濱先生のMC術もとても勉強になりました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第2回ミュージック・コミュニケーション講座 「踊る心身のワークショップ」
講師	針山 愛美 (バレリーナ、神戸女学院大学客員教授)
実施日時	2019年5月10日(金) 14:00 ~ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第2回目の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、海外で活躍するバレリーナとして毎日放送「情熱大陸」で紹介された、神戸女学院大学客員教授の針山愛美氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。</p> <p>針山氏はボリショイバレエ学校を首席で卒業後、モスクワ音楽劇場バレエ団、エッセンバレエ団(独)、ポストンバレエ等でプリンシパルとして活躍のほか、ベルリン国立バレエ団で10年間活躍。数々の賞を受賞され、世界各地で公演するかたわら、審査員としてロシア、ヨーロッパ、日本各地で活躍されている。世界と日本の架け橋になるべく、インターナショナル・ワークショップで講師として招かれている。</p> <p>普段はオーケストラや合唱、器楽の練習をする合奏室が、針山氏の講義が始まるとバレエのスタジオに一変した。まず初めに、ピアノの伴奏で東京音楽大学25名と神戸女学院2名が、舞踊科4年生の9人を手本にして、基本のポジション(1番~5番)を体験した。器楽で練習の前に音階を弾いたり発声練習をするように、バレエではバーを使い、呼吸をしながらストレッチをする。続いて3拍子系のポロネーズやワルツを体験した。ポロネーズは1, 2, 3の3拍目にアクセントがきて足を出す、ワルツは1拍目にアクセントがくる。どちらも同じ3拍子だが、実際に動いてみると演奏と比べて、全く違って驚いたという声があがった。</p> <p>バレエの歴史や衣裳について講義を聞いたあと、バレエ鑑賞をする時に知っておきたい振り付け(マイム)の「あなたは美しい」や「私と結婚してくれますか」などを体験した。ダンサーの動きにはすべて意味があり、オペラと違って声を出さない代わりに、体や指先、表情、目線などで意思を表現する。器楽が音でリズムや強弱、感情などを表現するところは、バレエと共通していると針山氏は言う。</p> <p>舞踊科の学生にカノン(音楽では複数の声部が同じ旋律を異なる時点からそれぞれ開始して模倣する様式の曲)をバレエで表現してもらった。チャイコフスキーの《白鳥の湖》のように手の高さを、1ミリもずれないように全員で揃えて踊る場合もあれば、カノンのように同じ動きでも、踊る場所やタイミングを変えると複雑に見える。舞踊は身体を使って表現する芸術だが、それは音楽、オペラ、美術に共通するところがあり、今後もいろんな経験をして、すばらしい表現者、音楽家、演奏家になって欲しいと学生たちに語られた。</p> <p>最後に、チャイコフスキーの有名な〈4羽の白鳥〉を、全員で踊って締めくくった。</p>

〈学生のことば〉

・今回は座学ではなく、全身を使って表現することを学んで、とても楽しかったです。運動もしないですし、舞踊経験もほぼないですが、体を動かし

てリフレッシュできました。体を整えるために、相手に気持ちを伝えるために、色々な理由で舞踊が大切にされてきたのだなと思いました。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

・表現は様々なものできます。私の場合は自分の個性を音で表現しますが、舞踊の方々がどういう風な気持ちで踊っているのか、少し感じることができたので、もう少し色々なものを見に行きたいと思いました。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

・初めてバレエの動きを体験したのですが、とても楽しかったです。授業の初めは動作が難しそうであるか不安でしたが、大人数で一体となって一つの動きを完成できて、達成感がありました。指だけの動きにもそれぞれに意味があって非常に興味深かったです。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・授業後、姿勢が自然と良くなっていましたので、バレエってすごいなと思いました。音楽と踊りを通してその曲がもつリズム感などを感じることができて、とても勉強になりました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)

・今回の講義では、今までバレエをしたことがなく、みなさんの前でやることに不安もあり、少し恥ずかしい気持ちがありました。実際にやってみるととても楽しく、もっと学びたいという気持ちになりました。このように、これからも初めてのことをする時も積極的に取り組みたいです。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・バレエは1度も体験したことがなかったため、とても興味深かった。奥が深いなと感じたと同時にすごく体力を必要とすることがよくわかり、見た目以上に大変だと思いました。

(東京 / ピアノ / 1年)

・ワルツやポロネーズなど、自分が普段勉強している曲のステップなども学べたので、その踊りを思い浮かべて演奏すると、よりよくなるのではないかと思いました。

(東京 / ピアノ / 3年)

・まさか大学に入ってバレエを学べるとは思っていなかったので感激しました。「私」「あなた」の表現の仕方を初めて知りました。

(東京 / ピアノ / 1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第3回ミュージック・コミュニケーション講座 「裏声歌手が語るファルセットの世界」
講師	彌勒 忠史 (声楽家、カウンターテナー)
実施日時	2019年6月14日(金) 14:00 ~ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第3回の講座では、コンサートやメディアをはじめ、世界的に活躍するカウンターテナーの彌勒忠史氏を講師に迎えて、神戸女学院大学から発信した。</p> <p>まず、自己紹介の後、カウンターテナーとは何か、ファルセットとは一体どういった声のことなのかが語られた。</p> <p>クラシックでは男性が裏声、いわゆるファルセットを用いて歌唱することは珍しく、マイナーな存在であるという扱いを受けるが、様々なポップスやハワイアン、民謡など世界中の「歌」でいえばむしろファルセットを用いて歌唱することのほうがマジョリティであると述べた。</p> <p>ここで実際に、自身が大好きだという Earth, Wind & Fire というファンクバンドの楽曲や、森山直太郎の「さくら」、さらには沖縄の民謡を学生たちに聴かせ、いろいろな歌の分野においてファルセットを用いていることを紹介した。</p> <p>はじめは歌舞伎の世界に憧れ、自らもそこで歌舞伎役者になりたかったそうだが、いつしか「舞台に立ちたい」という思いからオペラ、声楽の世界に入ることを決めたという。</p> <p>幼少期から周りの大人の影響でジャズやファンクをメインに聴き、学生時代はバンドを組んでいたからか、自分では歌といえばファルセットで歌うものだと思っていたと述べ、芸大入学当時はファルセットを使わない歌唱に違和感を覚えていたと語った。しかし、とあるコンサートでの共演者がカウンターテナーだったことをきっかけに、「今までどおり普通(=裏声)で歌えばいい」ということに気づき、以来、カウンターテナーとして活躍するようになったという。</p> <p>クラシックという狭い世界ではマイノリティとされるカウンターテナーも、歌の世界に視野を広げればむしろマジョリティであり、これはどのような事柄にも言える。狭い視野で見れば普通ではないことも、広い視野で見れば普通であることは沢山あり、「世界をどう見るのか」について考えるべきだと講座を締め括った。</p> <p>講座の後には短時間、質疑応答の時間も設けられ、学生たちは「ファルセットを出すコツについて」「どんなバンドが好きだったのか」などの質問があり、和やかな雰囲気での応答が行なわれた。</p>

〈学生のことば〉

・カウンターテナーという言葉に恥ずかしながら知らず、とても勉強になりました。ポップスや日本の民謡にもファルセットが使われていて驚きました。そういうところに注目して聴いたのは初めてでした。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

・ちょうど西洋音楽史の授業でカストラートについて勉強したので、とてもためになるお話を拝聴させて頂きました。カウンターテナーとテノールは全く違うものだということが分かり、アルトやソプラノにも勝る高音を必要とするということは知らなかったので勉強になりました。ポップスの曲にもファルセットを用いられているのが意外に多

いことが分かりました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

- ・マイナーのレッスンで声楽を始めたので、練習するときにファルセットを気にしてみたいと思った。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

- ・すごく分かりやすい講座でした。友人にカウンターテナーがいるので、クラシックでファルセットを使っていることは知っていました。私たちがよく知っている邦楽やジャズなど沢山使われているということを知り、意識したことがなかったので驚きでした。世界中の色々なファルセットの曲を聴くと同じファルセットだが、少し歌い方が違うのかなと思いました。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・先生の声が東京まで届いていたので、すごいと思いました。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

- ・ファルセットが上手な人は生まれ持った声帯の性質が関係しているのか？ (東京 / ピアノ / 2年)

- ・よく日本人のアーティスト星野源さんもブラックミュージックの影響でファルセットを使う作品が多く、カラオケでも歌うのでファルセットを忘れずにそしてたくさんのCDを買ってたくさんの音楽に触れていきたいと思いました。

(東京 / ピアノ / 1年)

- ・クラシックの西洋音楽を学ぶうえで、自分のバックボーンをよく勉強したほうが良い、という言葉にとっても考えさせられました。日本人として日本の文化も学んでいきたいと思いました。また、音楽に対する考え方も変わった気がします。ファルセットのイメージも大きく変わりました。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・声楽の中でのカウンターテナーの位置づけは、正直少数派という印象であるが、先生が最後におっしゃっていた「世界をひっくり返して広い世界の視点でみると、自分の身体を楽器として生きている人々では女性が低音を出せることもあれば男性が高い声をきれいにすることもあり、それを生業とすることは素晴らしいこと」だという言葉が私にとって発見になった。

(東京 / ピアノ / 1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第4回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第4回ミュージック・コミュニケーション講座 「ほぐす・つながる・つくる!カラダを奏でるコミュニケーションと表現 ～音と動きは双子のきょうだい!?～」
講師	新井 英夫 (体奏家)
実施日時	2019年6月28日(金) 14:10～15:40
実施場所	東京音楽大学 C400 教室
講座の概要	<p>新井英夫氏は、自然に学び、力を抜く身体メソッド「野口体操」を創始者野口三千三氏に教わって深い影響を受け、投げ銭方式の野外劇や廃校小学校体育館でのパフォーマンス公演など、コミュニティと人をつなぐユニークな劇団活動主宰を経て、のちに独学でコンテンポラリーダンサーとして国内外で活動している。舞台活動と併行して、「からだを奏でるワークショップ～ほぐす・つながる・つくる～」を日本各地の教育・福祉・社会包摂に関わる現場で実施され、多様な実践の経験をお持ちである。</p> <p>今回は音と密接に関係のある動きに着目して、さまざまな切り口でお話と実践をしていただいた。ワークショップは笛と太鼓の演奏で始まった。笛の演奏に合わせて学生が手拍子をする、おもむろに先生がフレームドラムをコインのように床に回し投げる。フレームドラムの動きがピタリと止まった瞬間に、学生の拍手が一本締めのように揃って響き、一体感とともに場の空気が引き締まった。</p> <p>次に全員で円になり、手を繋いで身体をふにゃふにゃ動かすゲームを行った。始める前に、見本として示された和紙はとても薄くて軽いので、床に置いて端から空気を含ませるとふわっと浮き、その動きが向かい側に伝わっていく。これは、小さなエネルギーでも身体が柔らかければ伝わることを示しているようであり、普段運動をする機会のない学生の動きも徐々にほぐれていった。</p> <p>次に「スルッとピタ」というワークを行った。二人一組のどちらかがスルスルと身体を動かし、ピタッと止まる。すると、もう一人がまたスルスルと動き、最初の人のも身体どこか一点に触れてポーズを決める。続いてまた一人目が身体を動かし、相手の身体一点に触れてポーズを決めるという繰り返しである。このワークでは予想していない相手の動きや姿勢にその場で反応することが求められ、クリエイティビティが刺激される。また、必然的に相手の身体一点に触れなくてはならないので、パーソナルスペースを超えた関わりができる。このワークは様々な年齢に合わせて変化を加えられる柔軟性があるとのことで、高齢者施設では手だけを使ってワークをするなどの例が挙げられた。</p> <p>次に、紙コップをつかった即興演奏。ひとり二つの紙コップを持ち、叩く、投げるなどありとあらゆる方法で音をつくる。誰にとっても身近な小物を使用することで参加者の間にフラットな関係が生まれ、各自が創意工夫をこらした。全体を通して、短い時間で様々なタイプの人を巻き込み、関係性を築く力に魅了された。</p>

〈学生のこぼし〉

・体奏家ときいて、どんな方がいらしてワークショップをするのか、想像が付きませんでした。身体を使ったとても楽しいワークショップで

した。年齢や性別を超えて楽しめるのが面白かったです。(東京/弦楽器/3年)

・和紙や紙コップ、教室の壁など、楽器を使わずに

リズムや音で何かを表現することが新鮮で面白かったです。また友達と身体をくっつけたり、支えあったりすることで距離が縮まった気がしました。音をだんだんと消していく場面では音を聴きあうことの面白さや楽しさを学びました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)

・最初から私たちを巻き込むのが上手でびっくりしました。身体を様々な方法で存分に動かしていくのがとても楽しかったです。日本の文化を生かして和太鼓のような小さい太鼓を使っているのもとてもよかったです。(東京 / ピアノ / 3年)

・普段なさっている活動を、身体を使って実体験できたのはとても為になったと思いました。子どもたちの個性を引き出す動きの偶然性や、イメージする力を養う面でわかりやすく、それを楽しくできることがとてもよいと思いました。

(東京 / 弦楽器 / 2年)

・紙コップや身近なものを楽器として使ってみたいと思いました。また、お年寄りや障がいを持った方とみんな公平に参加できるようなワークショップを作りたいと思いました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)



・参加者を考えて相手に合ったワークショップをしたかったと思った。音大生だからこそ少しパワーアップした内容をやらせてくださったのも楽しかったです。みんなに楽しんでもらえるワークショップとして参考にしたいです。(東京 / ピアノ / 2年)

・「こうしなきゃ」ではなく、個々の自由な発想を生み出したい時に、身体をたくさん動かすことができかけになるのではないかなと思うので、子どもたちとコミュニケーションを取るときなどに生かしたいと思います。(東京 / 弦楽器 / 2年)

・先生がユニークな授業をされていておもしろかった。リズム感が養われる授業で、音でいろいろなことを伝えられるから改めてすごいと感じた。自分の想像する情景をどういうリズムや音を用いたら伝えられるのかということをよく考えるが、その創造力が豊かになったと思う。可能性が広がった。(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第5回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第5回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽ワークショップに役立つ基礎知識 ～コード、モード、リズムで遊ぶ～」
講師	鈴木 潤 (ピアニスト・作曲家)
実施日時	2019年10月11日(金) 14:10～15:40
実施場所	東京音楽大学 C400 教室
講座の概要	<p>鈴木潤氏はレゲエの分野でピアニストとして活躍、その後、編曲・作曲の分野にも活動範囲を広げられた。演奏活動と並行して保育園、小学校・特別支援学校・高齢者施設などで音楽ワークショップを行い、独特な「放置型即興」(音の砂場・音の運動会)で知られている。今回は、音楽ワークショップを導く上でヒントとなるコード、モード、リズムについて実践を交えて講義をしていただいた。導入として、身体を使って行う簡単なワーク「スイッチ」を行った。このワークは親となった人の動きを他の人が真似をするというワークだ。ただし親が次の動きをしてもスイッチと言うまでは真似をしてはいけない。集中していても反射的に真似してしまい、誰もが間違える可能性がある。ただし正解や勝敗に目を向けるのではなく、どんな動きであれ真似するという点に面白さがあり、誰でも参加できるワークであった。テレビ画面を介してこのワークが実現したことも興味深かった。</p> <p>次にコード、モード、リズムについての実践的講義に移った。音楽大学ではコードネームに苦手意識を持っている学生も多い。そこで鈴木潤氏から、コードはポジションの移動と考えるという提言があった。その考えに基づき、和音の位置を数字に置き換え、数字の間隔でコードを掴む方法で「さんぽ」を弾く方法を実践した。手の形は決まってい移動するだけなので、苦手と思っていたコードが簡単に思えたという声がかかれた。次に教会旋法を使用して即興演奏を試みた。主にクラシック音楽を学ぶ学生は、機能と声にとらわれ不協和音を避けようとする思いが強く、そのために即興演奏が単調な音楽になってしまう傾向にある。しかし、ワークショップの現場で音楽創作をする際には、どの音を弾いても美しく聞こえるように音を選ぶことが重要である。そこで使える音を限定する方法で即興演奏を行った。この方法を用いれば和声の禁則を心配する必要がなく心地よく演奏ができるので、即興に自信を持って取り組むことができる。講座の終盤では、作曲の例としてワークショップの参加者から単語を募り、その言葉を歌詞にして歌を作っていく手法を学んだ。歌詞をつけるとなると言葉を選び抜いて創作するイメージがあるが、鈴木潤氏はスピーディーに歌詞とメロディーを引き出し、和声をつけて歌に仕上げた。参加者の何気ない一言が歌詞に盛り込まれ、参加者の日常とリアルな姿を映し出す曲に仕上がった。全体を通して、ワークショップリーダーとして必要な音楽的スキルを満遍なく体験させてもらう機会となった。</p> <p>授業終了後、学生の質問にも丁寧に答えていただいた。豊かな経験や知識のみならず、音楽家としてのお人柄に感銘を受けた学生も多かった。</p>

〈学生のことば〉

・即興で歌を創作したり、決まった音階を使って即興演奏したのがとても楽しかったです。ふだん即興が苦手なのですが、決まった音階の中だとやり

やすかったです。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)

・コードの作り方が印象的でした。ジャンプして

移動してコードをつかむ方法はどんな人にもわかりやすく、形が決まっているのでやりやすかったです。音を決めて自由に即興するというのも面白かったです。
(東京 / 弦楽器 / 2年)

・授業が始まった時から空気が明るく楽しくてびっくりしました。内容も自然と引き込まれて気づかないうちにすごく笑顔になっていました。コードは苦手意識が強く、はじまる前は不安な気持ちでしたが、そんな気持ちも吹っ飛んでしまいました。楽しい時間をありがとうございました。

(東京 / ピアノ / 2年)

・最初から最後までとても楽しい授業を受けることができました。これなら飽きてつまらなくなってしまう子が出てくることは少ないだろうなと思った。また、私たちが作った旋律に素晴らしい和音をつけてくださり感動しました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・みんなの言葉から歌詞を作ってコードによって曲調を変えて、どの世代でも楽しめそうだなと思った。即興なのに沢山引き出しがあって本当にすごいなと思った。

(東京 / ピアノ / 1年)

・即興の楽しさ、そしてコードの使い方が面白かったです。もし自分が小学校のときにこのような授業を受けていたら非常に印象深く思い出に残っていたらと思う。

(東京 / ピアノ / 1年)

・音を限定してメロディを創作し、指揮の要素を入れて音楽作りをするワークショップが楽しかったので、子ども対象でやってみたいと思いました。

(東京 / 弦楽器 / 3年)

・スイッチのゲームが楽しくてリズムアンサンブルも楽しめたので、ワークショップをする際に取り入れてみたいです。子どもたちの意見から歌や曲を創作するのもやってみたいです。

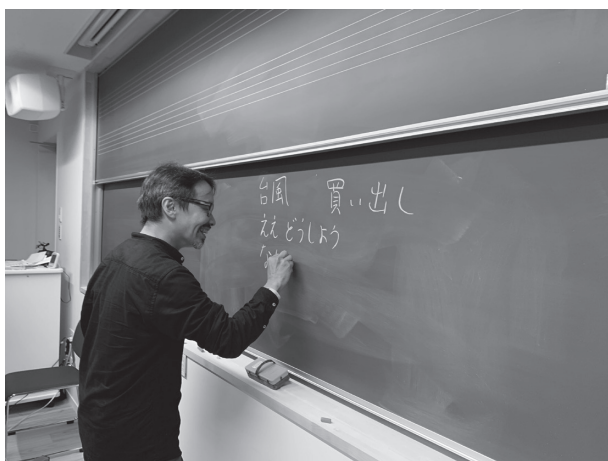
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)

・いつかワークショップを自分で開催するときに、教えていただいたコードを利用しながら、音楽の力で人の集中力を維持したいです。

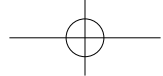
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・ワークショップで必要なことを凝縮して学ぶことができました。全くテーマを決めずに、歌詞の言葉を拾って行ったところがおもしろかったです。今日の授業は、ビデオでは少し難しいところがあったように思いますが、そこも楽しみに変えて授業されていた鈴木先生がすごいと思いました。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。



令和元年(平成31年)度 第6回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第6回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学 学生
実施日時	2019年11月1日（金）14:00～15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 会議室
講座の概要	<p>2019年9月17日～21日に神戸女学院大学で実施した「音楽作りワークショップ特別研修」（28～31ページ参照）について、本学の履修生が発表を行った。5日間の研修について、各日のアイスブレイクやグループワークの内容、時間配分などをパワーポイントを使って報告した。アイスブレイクでペアになった相手に目を閉じてもらい、耳元で指をはじいたりこすったり音を聴いてもらったことを、東京音楽大学の学生に体験してもらった。最終日の作品発表については、「エイリアンの旅」を作るに至った経緯や工夫について発表してから、実際に作った作品を記録映像で鑑賞してもらった。最後は東京音楽大学の学生から、子どもたちと接した時間などについて質問を受けた。</p> <p>発表した学生は1回生で、資料や映像をたくさん集めて作成していたが、一人で発表をしたり時間配分を考えるのが難しく、手間取るシーンも多々あったが何とか最後まで発表することができた。さらにわかりやすく語る点では、まだまだ改善する余地があるが、他大学の学生に報告するという経験は、学生にとってよい経験となった。</p>

〈学生のことば〉

・今回は準備することが多くて大変でした。あまり緊張などはなかったですが、何かを言うとき以外に、DVDのセッティングやパワーポイントの資料を動かすことも全部1人でしなければならなくて苦労しました。

（神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年）

・私は東京のワークショップに参加したのですが、神戸は東京とはまた違った音楽作りをしていて興味深かったです。とてもわかりやすいプレゼンで、どのように音楽ができて、どのように音楽が良くなっていくのかなど、様子が見られて楽しかったです。

（東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年）

・5日間の内容を詳しく説明して下さったので、とても分かりやすかったです。映像で実際の様子を見ることができたので、説明と合わせてどのようなワークを行ったかよくわかりました。東京とは違う内容で、聞いていて新鮮でした。（東京 / 弦楽器 / 2年）

・誰かが作ったものに誰かが新たに加えていくことで、音楽をどんどん広げていくことができるという体験がとてもいいと思いました。手で音程を示してみんなで歌うというのは、子ども向けのワークの時は大事だと思いました。ワークショップをする人と受ける人の個性によって、全く違う結果になるのが面白さであり、音楽ワークショップの醍醐味だと思いました。

（東京 / 声楽 / 2年）



※写真は神戸女学院大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第7回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第7回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興はこわくない！～自由な発想とカンタンな方略で音楽を膨らませる秘訣～」
講師	渚 智佳 (ピアニスト)
実施日時	2019年11月15日(金) 14:10～15:40
実施場所	東京音楽大学 C400 教室
講座の概要	<p>渚智佳氏は、幼少時よりヤマハ・ジュニアオリジナルコンサートで作曲に取り組み、ピアノ演奏のみならず作曲や編曲の分野でも活躍している。昨年度は即興の歴史的背景や演奏のコツについてお話いただいたが、今年度は先生の実演も交えて学生との即興の時間を多くとっていただいた。</p> <p>まず、即興ができることの利点について演奏現場の目線からお話があった。何か弾いて欲しいと頼まれたときに柔軟に対応でき、様々な現場で活躍ができること、万が一演奏会で暗譜が飛んでしまったとしても和声進行の仕組みが分かればなんとかその場をくぐり抜けることができるなど、音楽の現場にいらっしゃる先生だからこそ伺えるリアルな内容であった。楽譜を正確に演奏することを徹底的に学ぶ音楽大学生から見ると、即興演奏はリスクが高いように感じてしまうが、実際は過去の作曲家の模倣が出発点であると伺った。即興の練習としてまず先生が歌った音を反復するコール＆レスポンスのワークを行った。そしてその発展形として先生の歌った歌の続きを考えてみるワークを行った。このワークから、即興とは決してゼロからの作曲ではなく、提示された音楽と類似した音型、モチーフの部分的模倣、あるいは和声的ゼクエンツの要素を用いながら進めていくものであることを学んだ。次に、カデンツを例に即興の例を示された。ほとんどの西洋音楽は音階とアルペジオで出来上がっており、即興をできるようになりたいのであれば、まず、音階とアルペジオの練習をするとよいという提案があった。ここまでの内容をもとに、神戸女学院の学生から提案された小さなモチーフを基に、渚先生が即興演奏の例をいくつか提示された。同じメロディーに対して様々なヴァリエーションや和声をつけることで音楽の幅が無限に広がることを感じられた。</p> <p>次に、実際に学生にも即興を実践する機会が与えられた。和声を担える楽器とメロディーを担うことのできる楽器を組み合わせ、いくつかのグループに分かれて即興を行った。東京音大でも毎週の授業で即興に取り組んでいるが、音程や和声がどうしても単調になり、リズムにフォーカスしがちである。ここでは、練習として「ACH」の音をモチーフに即興演奏を行った。前半の即興よりも複雑な和声にチャレンジする学生もおり、相手の音をよく聴いて柔軟に対応できるようになった。最後は先生にも演奏に加わっていただき、全員で生き生きとした演奏を生み出すことができた。</p> <p>講座の終盤で「即興とはコミュニケーションである」というお話があった。相手が提案した音に反応し、相手のやりたいことをよく聴いてそれに反応する。まさにこれが音楽コミュニケーションである。即興のみならず、楽譜がある楽曲でも同じことが起きているとお話だった。質疑応答で「どうしたら和声が思いつくようになりますか？」という質問があり、その答えとして、とっさに出てくる和音は自分の音楽の引き出しであるという言葉が印象に残った。即興としての訓練も必要であるが、何よりもたくさんの楽曲に触れ、幅広い音楽を学んでいくことの重要性が強調された。</p>



〈学生のこぼ〉

・先生の即興が上手だったのでとても勉強になった。
(東京 / 作曲 / 1年)

・即興について深く知ることができた。バッハやツェルニーの即興についても知ることができました。自分も即興を試してみたいと思いました。
(東京 / ピアノ / 1年)

・これまで即興することは私にとってとても難しく程遠い存在でしたが、今回の授業で親近感が湧き、今では空いた時間に即興で弾いたりしています。
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・即興というものに苦手意識を持っていましたが、実際にグループでやってみると、たとえ不協和音であったとしてもしっかりと曲ができたので、とても楽しかったです。
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・初めて即興をしました。即興することは怖くて難しそうだなと思っていましたが、やってみると楽しくて、意外とちゃんと曲になるのだなあと思いました。やってみて本当によかったです。
(東京 / ピアノ / 2年)

・即興はずっと苦手意識があったのですが、和音とメロディーの人で分担したり、音階やアルペジオ、トリルを使うことによって難しく考えずに気楽に楽しく取り組むことができました。
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)

・これから何か伴奏や作曲をするときに生かしたい。ピアノを弾きながら作っていたのですが、今回の授業を受けて、まずたくさんの曲に触れること、そしてたくさん練習することを学びました。
(東京 / ピアノ / 1年)

・何かしらワークショップを開いたときに必ず必要になってくるのが即興力だと思ったので、今後即興スキルを少しずつ上げてワークショップに生かしていきたいです。
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・友達と一緒に即興をやってみたいなと思いました。また即興で伴奏付けができるようになりたいです。即興力を伸ばすためにいろいろな曲を沢山学んでいきたいです。
(東京 / ピアノ / 2年)

・即興を久しぶりにして楽しかった。先生が何回も調を変えて即興されていたのがすごいと思った。自分も絶対に即興が必要になってくるので、とても役立つ講座だった。即興はある程度演奏力が求められるとおっしゃっていたので、即興の練習はもちろん、普通の練習もたくさんして演奏力を高めていこうと思う。
(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第8回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第8回ミュージック・コミュニケーション講座 「コンサート企画の表と裏」
講師	稲本 渡 (クラリネット奏者、株式会社音屋組・代表取締役)
実施日時	2019年11月29日(金) 14:00 ~ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第8回目の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、株式会社音屋組・代表取締役でクラリネット奏者でもある稲本渡氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。</p> <p>稲本氏は大阪府立淀川工業高等学校吹奏楽部の出身で、オーストリア国立グラーツ音楽大学を満場一致の最優秀で卒業後、2008～2011年に兵庫芸術文化センター管弦楽団で活躍した。京都御苑で奉仕演奏をする傍ら、ビルボードライブや演劇にも出演し、映画では音楽家役で出演するなど多方面で活躍している。音楽と地域資源とのコラボレーション事業を展開し、東京と大阪でオーケストラをプロデュースして様々なジャンルとの全国ツアーを行っている。2017年から堺市の親善アーティストに就任している。</p> <p>2度目の登壇となる今回はパワーポイントを使い、コンサートに携わる表方(演奏者、舞台に立つ演者)と裏方(制作、音響・照明・舞台スタッフなど)のそれぞれの役割を、レストランの組織図に見立てて説明された。コンサートの企画内容は常に、目的・集客・付加価値をつける、主催者とスポンサーにメリットがあるような「Win-Win」の関係を目指していると語った。</p> <p>音屋組が行っている堺市と音楽イベントのコラボレーション事業「堺輪音」では地場産業によるロビーでのイベント限定の物販を行い、商品売り上げの何割かを出展料として主催者がもらう仕組みで、両者に利益があるように運営していると説明された。また若手奏者の育成とスカウトを目的とした「堺管弦打楽器コンクール」や、全国で行っているオーケストラによるコンサート「ジブリの思い出がいっぱい」では、ジブリ映画で実際に声優をしている人に出演してもらったり、ミュージカルの新しいコンサート「Brand New Musical Concert」では、それぞれに活躍しているミュージカル・スターが、一つのコンサートに集結したことで集客数が上がり、チケットを完売することができた。</p> <p>最後の質疑応答では、友人に宣伝するにはどうしたらいいかという質問に、SNSを使ってシェアをしてもらい、広告にはあえて情報をすべて載せないなどの助言をされた。予算の少ない学生がコンサートをするにあたって、スポンサーにどのように頼むといいかという質問には、学生とコラボレーションしたい企業はたくさんあるので、勇気を持って行動を起こしてほしい、と学生たちを励まして講座を締めくくった。</p>

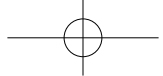
〈学生のことば〉

・専攻が作曲ということもあり、なかなか演奏の方から企画の面について聞くことがないので、貴重な機会でした。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)

・自分が作った曲を誰かに演奏してもらわないと誰かに届けることはできないので、演奏者の意見を聞くことを大切にしようと思いました。いつか自分も企画する側をやってみたいと思いました。

(神戸 / ミュージック・クリエイション / 1年)



・今の時代にあったコンサートを企画するにあたっての工夫、音楽以外のジャンルの人とコラボをして付加価値を作ることの大切さが、自分で企画を考えてみてわかりました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・どうやって音楽を広げていくか、堺市を盛り上げられるか色々な目線からアプローチしていて、とてもすごかったです。売り上げだけではなく、音楽を定着させるためコンサートを開催したり、アイデアが面白かったです。付加価値を上手に使っていると思いました。

(東京 / ピアノ / 2年)

・コンサートの裏方さんの、仕事の大変さが非常にわかりました。

(東京 / ピアノ / 2年)

・どのようにコンサートが成り立っているのか、目的や付加価値、Win-Winの関係など仕組みを知ることができました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・普段ではなかなか聞けない話を聞くことができ、面白かったです。演奏者になったとしても、裏方さんの仕事を理解するのに大切だと感じました。今回、付加価値というのを初めて知りました。また一つのことなどを成し遂げるのに、様々な方向からアプローチすること、地域の人たちと積極的に関わることを活かしていきたいです。

(東京 / ピアノ / 2年)

・来年コンサートをするので、その時に活かしていきたいです。

(東京 / ピアノ / 1年)

・私も自分で演奏するほかに、裏に回って演奏を支えたいと思っていたので、今日の講義を活かしていきたいです。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・企画、制作をやってみたくて思いました。

(東京 / ピアノ / 2年)

・Act Projectの活動に活かしていきたいです。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・もし自分でコンサートを企画することがあったら、様々なものとコラボして付加価値を上げたいです。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年)

・コンサートを開くことの大変さを実感しました。

(東京 / ピアノ / 1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第9回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会(東京音楽大学)
発表者	東京音楽大学 学生
実施日時	2019年12月13日(金) 14:10 ~ 15:40
実施場所	東京音楽大学 C400 教室
講座の概要	東京音楽大学の今年度の実践から、7月に行ったワークショップと9月に開催した特別セミナーの内容について学生が報告をまとめ、発表した。それぞれの取り組みの内容については22~27ページを参照されたい。 発表にあたっては、学生がパワーポイントと映像、および原稿を準備して、限られた時間内でわかりやすく伝えることをめざした。

〈学生のこぼ〉

- ・2グループとも、わかりやすくまとまっている発表で自分も勉強になりました。アイスブレイクでいかに緊張をほぐせるかで、実践のワークへの積極性が変わってくると思った。小さい子に接するときに、ハイテンションでガリガリ盛り上げようとするよりも、意外と隣で見守ってあげることも大切と教わり、生かしたいと思った。とてもわかりやすかったです。(東京/声楽/2年)
- ・先輩方のプレゼンテーションが素晴らしかった。色々な動画を見させていただいて興味を持てたので来年参加してみたいです。(東京/ミュージック・リベラルアーツ/1年)
- ・発表では、どこで区切ったら伝わりやすいかを意識をしながら読んだ。No talkingのワークや生徒だけのアイスブレイクなどなど、興味を惹かれるものがたくさんあるセミナーだったと思いました。(東京/弦楽器/2年)

- ・2グループのプレゼンのクオリティがとても高く素晴らしかったと思います。子どもとワークショップを行う際は、相手の目線で考えて否定的なことを言わないことが重要であると学びました。(東京/ミュージック・リベラルアーツ/1年)
- ・音符のリズムがわからない人でも「まぐろ、ごはん、パン」といった言葉にすることによって、みんなが参加できる上に楽しめて良いなと思った。リーダーとなる人が引っ張ってくれることにより、即興もやりやすくなると思う。リーダーの存在は重要。出てくるアイデアを否定せず、押しつけず、一緒に創ることが大切だと思った。(東京/声楽/2年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

令和元年(平成31年)度 第10回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第10回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
講師	武石みどり（総括）、東京音楽大学学生（デモンストレーション）
実施日時	2020年1月17日（金）14：10～15：40
実施場所	東京音楽大学 C400 教室
講座の概要	<p>東京音楽大学の講座履修学生が、シニア向けのインタラクティブ・コンサート（2020年3月31日 区民ひろば南池袋で開催予定）で行うワークの一部を実践した。区民ひろばのインタラクティブ・コンサートは、毎年本講座の履修学生がその学びを実践に生かす場として春休みに行っている。</p> <p>今回はヴィヴァルディの《四季》の「春」を題材に、ワークとして4つの場面（春が来て小鳥がさえずっている／雨が降り出す／嵐となる／雨が上がり日が差してきて、再び平穏な情景に戻る）に応じた音楽を創作し、最後に作品の演奏を聴いてもらう構成とした。授業では、3月にリーダーを務める学生が他の学生を参加者に見立て、まずはアイスブレイクで「かぶらない」ゲーム（22ページ参照）や「指示に従って動く」ゲームをリードし、緊張を和らげた。次に、4つの場面を描いた絵を用いて《四季》のワークを行い、実際に4グループに分かれてそれぞれの絵をヒントに音楽を創作した。その後、出来上がった各グループの音楽をどのようにつなげるかを皆で考えた。中継授業の特徴を生かして、東京と神戸で演奏をつなげることにより、最終的にひとつの作品に仕上げた。最後に「春」の冒頭部分を演奏して、インタラクティブ・コンサートの概要を示した。プレゼンテーションの後、参加者役を体験した学生たちから実際にやってみて感じたことや問題点をフィードバックしてもらうことにより、3月の実践に向けて有益なアドバイスを得ることができた。</p> <p>授業の最後には、今年度1年間の振り返りとして各自の感想を発表しあった。</p>

〈学生のことば〉

- ・ 今日最後の授業では、先生ではなく学生の手で進んで、みなさんの成長、そして自分の成長を感じました。（東京／ピアノ／1年）
- ・ 他の授業は座学や実技の楽器ばかりだったけれど、この授業でいろんな楽器に触ったり、みんなでディスカッションをしたりバレエを体験したりするのが楽しかったです。他の人のアイデアを聞いたことも良かった。物事をいろいろな角度から見ることがきっかけになりました。（東京／ピアノ／1年）
- ・ 音楽と共に身体を動かす授業はこの授業だけだと思うので、なかなか体験できない楽しいものとして記憶に残りました。（東京／ピアノ／1年）
- ・ 中継授業を通して一緒に音楽を創作したり、学ん

だことを共有することができて貴重な経験ができました。今まで歌しかやってこなかったのも、みんなで意見を出し合って即興的に音楽を作るとはとても難しく慣れなかったのですが、他の人たちからインスピレーションを受けたり、引っ張ってもらったことで刺激を受けました。

（東京／ピアノ／1年）

- ・ 今まで音楽はただ楽器を弾いたり、準備したりしたものを見せようと思っていたのですが、この授業を受けて即興で音楽を作ったり、子ども向けワークショップをやったりしたことで視野が広がりました。特別セミナーや西武でのワークショップでも、実際の現場を経験することができて勉強になりました。

（東京／ミュージック・リベラルアーツ／3年）

・1年間を通して、学ぶことが本当に多かった。リーディングをするのは難しかったですが、徐々に皆の前で一緒に話すことが楽しめるようになり、これからはこういうことをやっていきたいと思うようになりました。アイデアの幅も少しですが広がったなと思います。(東京/弦楽器/2年)

・最後に神戸女学院の学生さんと音楽、合奏ができて本当によかったです。1年間本当にありがとうございました。(東京/ピアノ/1年)

・とても楽しかったです。音楽はこうであるべきという理想的な姿があるものと勝手に思っていました。そうではなくて色々な楽しみ方があり、感じ方があったと知りました。「もっと音楽をするときに心から楽しんで良いのだ」と自分を解放したくなりました。貴重な時間を過ごせました。(東京/ピアノ/2年)

・その場ですぐに考えてアイデアを出す即興性、他の人とのコミュニケーションの力を今後の活動に生かしていきたいです。(東京/ピアノ/1年)

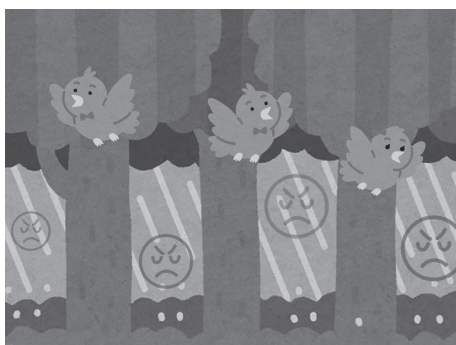
・この授業をとらなければ、一生ワークショップに触れることも自ら行うこともなかったです。どこかでリーダーシップをとることになったら、この経験を活かしたいと思います。(東京/ピアノ/1年)

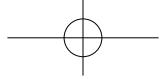
・音楽に普段あまり触れていない人にも音楽を楽しんでもらう機会を作ったり、そういうきっかけとなるようなワークショップなどをしたいなと思います。演奏以外でも即興的に音楽をつくりだして、みんなで共有して楽しめるような力をもっとつけたいです。1年通して色々なワークを体験させてもらいとても勉強になりました。ありがとうございました。(東京/声楽/2年)

・今回はストーリーが決まった上でのアクティビティで「10分で何かアイデアを」と言われて、短くて焦りました。東京音大の方々とお話することが多くて、楽しかったです。提示されたワークに即興的に対応する力をつけることが、私にとっての課題です。いずれは東京音大の人みたいにコンサートを企画するかもしれないので、そういった時にその力を活かしていきたいです。(神戸/ミュージック・クリエイション/1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。





音楽ワークショップ第10回 みたいなけキッズアーティスト 「音大生と一緒に音楽をつくろう！」

令和元年（平成31年）度 実習報告（東京音楽大学）

事業名称	第10回 みたいなけキッズアーティスト「音大生と音楽をつくろう！」
実施日時	2019年7月31日（水）13:30～15:00
実施場所	区民ひろば南池袋
共催	NPO 法人みみずくの杜、東京音楽大学連携センター
対象	豊島区在住・在学の小学生（参加者数13名）

〈事業概要〉

夏休み中に学童保育に通う小学生を対象として、4月からミュージック・コミュニケーション講座を受講し始めた学生5名がリーダーとなり、ワークショップを実施した。「架空の国、理想の国」をテーマに、小物打楽器を中心とする楽器を使用して音楽創作を行った。

■導入アイスブレイク

全員が円になり、リーダーの動きの真似をする。子どもたちは最初は集中できない様子が見られたが、だんだんとリーダーの動きについてきた。リーダーは、動きを変化させる際のメリハリや、子どもを巻き込みながら場の空気を作ることに、戸惑いながらもチャレンジした。



■「かぶらない」ゲーム

1～10までの数字を順にコールする。コールは一人1回だけで、誰がどの数字を言うかは決めずに開始する。他の人と同時に声が重なる（かぶる）ことなく10まで到達したらゴールというゲーム。

このゲームでは、リーダーの真似をするという縦のつながりではなく、周りをよく観察し仲間を意識するといった横の繋がりを生み出す目的があ

る。ルールが少し複雑に感じられるかもしれないという予想の下、リーダーだけのお手本を見せてからゲームを行った。数字カウントがうまくできたので、次に同じことを打楽器に置き換えて実践した。初めは楽器を奏することに集中してしまい周りの空気を感じる事が難しかったが、徐々に集中力が増し、一体感を持ってゴールに向かうことができた。

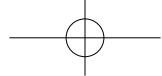
■歌（音楽創作の橋渡しになる音楽）

場があたたまってきたところで、本編の音楽創作に向けてテーマとなる素材をシェアした。「架空の国、理想の世界」がテーマなので、子どもたちが創作する国と国を繋ぐ橋渡しの曲として、ドヴォルザークの《ユーモレスク》をアレンジした歌を準備段階で創作しておいた。分かりやすく生き生きとした音楽を届けられるように、ピアノ、ヴァイオリン、歌の編成にアレンジして、音大生らしいサウンドを提示した。



■創作活動

テーマに沿って4グループ（1グループ2～4人）に分かれ、まずはどんな国に行きたいかを模造紙に書き出し、そのイメージで音楽を創作した。多様な子どもたちの中で、リーダーはできるだけ平等に意見を取り入れることを目指してチームをリードした。子どもとの接し方、アイデアの取り上げ方に柔軟な対応を求められ、リーダーとしての力が試されるシーンであった。



■発表

発表会として、事前に練習した「ユーモレスク」の歌と合わせて、4グループが創作した作品を演奏した。お菓子の国や勉強がない国などのアイデアが集まり、チームごとに特色がある音楽となった。参加児童だけではなくリーダーの音楽性も反映されており、ワークへの関わり方やリードの仕方によって様々な音楽が創作される様子を見ることができた。短い時間の中で仕上げなければならない難しさや、他のチームの音が聞こえて集中しにくいという問題もあったが、リーダーにとっては、その場で考え判断して事を進めていく決断力や柔軟な心を持ってチャレンジする経験の場となった。

〈リーダーを務めた学生のことば〉

音楽を本格的に勉強していない子供たちを教えるのは初めての経験でした。どのように接し、説

明したら良いのかとても難しく不安な気持ちでいっぱいでした。しかし先生や周りの学生を観察していると実は思ったよりもシンプルなものだと気づきました。同じ立場で話す、目をよく見る、しっかり話を聞く、一緒に喜ぶ、優しく話しかける、など。音楽の魅力を私たちがしっかりと理解すれば、子供たちに少しでも気持ちが伝わるんだなど実感し、子供たちも一緒に楽しんでくれていたので嬉しかったです。

前半が終わった段階で子供達から声をかけてくれ、リラックスしている様子を見て、私たちに心を開いてくれているのが感じられました。開始の受付の時にはみんな目も合わせないくらい緊張していたのに、帰りにはハイタッチをしていくほど、音楽やコミュニケーションを通して子どもたちと通じ合うことができました。楽しかった！！と言いながら笑顔で帰って行ってくれたのがとても嬉しかったです。

今まで音楽を感じる手段は、演奏会・レッスンしか知りませんでした。教科書や楽譜など何かに縛られた形でしか表現・体感できないと思っていました。しかし、ワークショップでは自由に自分の思うままに委ねて「音を楽しむ」という新しい世界を知ることができました。これは私にとって本当に良い経験でした。以前より少しずつ視野が広がり、考え方も柔軟に多様に考えられるようになったように感じます。この経験を、これからの自分の人生の多様な場面で生かしていきたいです。

(東京 / ピアノ / 2年)



ワークショップの様子

「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに 音楽づくりワークショップ 「イギリスの先生たちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう」

令和元年（平成 31 年）度 実習報告（東京音楽大学）

事業名称	「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに音楽づくりワークショップ 「イギリスの先生たちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう」
講師	デッタ・ダンフォード、ナターシャ・ジエラジンスキ (英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生)
実施日時・期間	2019年9月12日(木) 15:00～19:00 9月13日(金) 13:00～19:00 9月14日(土) 10:00～17:00 9月15日(日) 9:30～12:30 ※音楽づくりワークショップは9月14日午後のみ
実施場所	東京音楽大学 A 地下100教室 B500教室
参加費	東京音楽大学生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生は無料 一般参加者(上記以外) 5,000円 14日子ども参加：無料
主催・協力など	主催：東京音楽大学 協力：英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、神戸女学院大学
参加者数	東京音楽大学学生：6名 一般参加者：13名 14日のワークショップ：子ども12名 (小1年生6名、小2年生2名、小3年生2名、小4年生1名、小5年生1名)

〈事業概要〉

3年ぶりにデッタ・ダンフォード氏、ナターシャ・ジエラジンスキ氏を講師に迎え、4日間に渡ってクリエイティブ・ワークショップについての方法論を実践的に学んだ。3日目には実践の場として、一般募集の小学生を対象に音楽ワークショップを行った。近年、この特別セミナーには一般の参加者が増えているが、その中には東京音楽大学の卒業生が多く見られる。社会のニーズの変化により、ワークショップのスキルの必要性を感じ、学びの場が求められているようだ。他大学を卒業した一般参加者の場合、「自分の出身大学にはこのようなことを教えてくれる授業が無かった」ことが参加理由であった。このように卒業生の参加が増えていることは、在生にとって、様々なバックグラウンドを持つ社会人や音楽家と協同作業をすることで視野を広げる良い機会となっている。

1 日目前半：導入

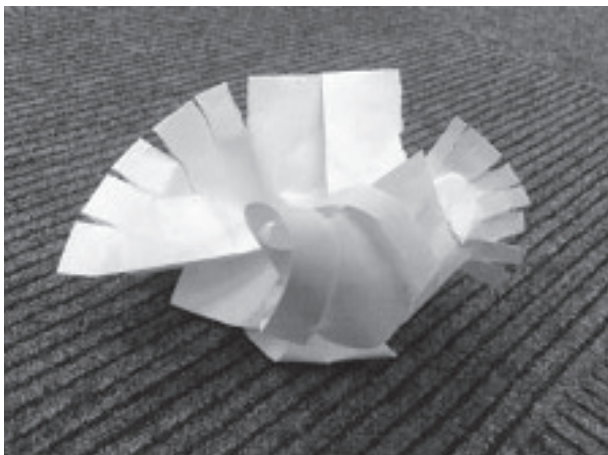
参加者が円になり、心と身体をほぐすためのア

イスブレイクからスタートした。ワークショップの経験の有無に関わらず、全員が同等の関係性でいられるようなシンプルなワークが中心となっていたが、1つのワークを参加者の興味関心に合わせて発展させ創造性の解放を目指すなど、講師の引き出しの多様さを感じることができた。

1 日目後半：紙の彫刻から音楽創作

A4の紙を折る、切るなどして自由に造形物（「彫刻」と呼ぶ）を作り、それが何に見えるかを少人数グループでディスカッションした。さらに共通性のある彫刻を二つ組にして、その作者どうしが組になって彫刻を基に音楽創作を行った。音楽創作のルールとして「3つの部分から成るもの」が課せられた。このワークでは一見意味の無いものに意味づけし、参加者同士の関係性を構築しながら自己原因性（自分のアイディア）を追求していくといった意図があるようだ。ワークショップリーダーの仕事は常に選択と決断を繰り返しながら場を作っていくことであり、短い時間で決断し、時

には修正を加えることが必要とされる。初めて出会ったチームの中で関係を築くにはとても良い課題であった。続いて「どうしたら音楽がより良くなるだろうか」という講師の問いかけをきっかけにして、楽器編成、和声の変化、指揮、演奏人数などさまざまなアプローチと方法により、音楽を豊かに創り上げていく作業が行われた。



1 日目まとめ：ワークショップの「価値観列島」

「価値観列島」とは、各人に3枚のカードを配布し、そこにワークショップを表現する言葉を1語ずつ書く。次に、床の上に、同じ意味や近い意味を持つ言葉が近くになるように工夫しながらカードを並べていくというゲームである。Enjoy, Love, Yes and, 多様性など様々な単語が並べられ、眺めているうちに参加者が共通して大切に思っていることや、様々な視点から見たワークショップの価値観がみられ、発見の多い機会になった。

講座の最後には2日目に向けて既存曲や自身のレパートリーから、音楽の素材を持ってくることが課題として出された。



2 日目前半：1 日目の振り返り

1 日目に質疑応答の時間が十分に取れなかったため、2 日目は前日の振り返りからはじまった。参加者が即興的な音楽創作に慣れていて、アンサンブルがよくできていると講師からのフィードバックがあった。確かに数年前に比べて東京ではワー

クショップの機会が増え、ディスカッションをする機会も増えて、リーダー経験者も増加している。これからの課題として、参加者それぞれのコンフォタブルゾーン（安心できる範囲）を一步踏み出し、リスクをとって挑戦すること、創作過程で言語的、非言語的コミュニケーションなど、多種多様なコミュニケーション手段を認めていくことが挙げられた。

ワークショップリーダーとしての課題を話し合う場面では、様々な対象に合わせたリードの方法や信頼関係の構築の方法について参加者各自の現場の様子がシェアされた。

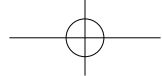
2 日目後半：既存楽曲の要素を用いた音楽創作

それぞれ持ち寄った素材を複数組み合わせ、新たな楽曲を作り出す課題が与えられた。日本の民謡にミニマルミュージックの手法を組み合わせ、楽曲を創作していたチームや、クラシックの作品にアフリカやスペインの異国情緒あふれる作品を組み合わせ、チームもあった。今回の一般参加者の専攻楽器はバラエティ豊かであったので、それぞれのバックグラウンドを生かした結果、色彩豊かな音楽ができあがった。講師が2日目の初めに課題として提言したように、参加者それぞれのコンフォタブルゾーンを一步踏み出し、リスクをとって挑戦し続けることを実践する1日になった。

3 日目前半：小学生対象のワークショップの準備

3日の午後に行う小学生対象のワークショップについて、2日目に引き続き相談を重ね、参加者各自のアイデアを基にワークショップ全体の構成を考える作業に入った。今回は、ワークショップリーダーを務めるのが初めての参加者もいたので、リーディング体験では、大きなグループを率いる際に必要なエネルギーをもった的確な指示を出すことを練習した。そしてリードする時は孤独ではなく、「仲間と助け合いながら場を作りあげていく」ことを学んだ。





3 日目後半：小学生対象のワークショップ

参加者の話し合いによりワークショップの構成を決め、それぞれ誰がどのシーンをリードするかを確認して、ワークショップを開始した。

全体でのアイスブレイクの後に、少人数の三つのグループに分かれて音楽創作を行った。それぞれのグループのコンセプトは、リズム、スペース（余白）、そして対話である。参加者は、ワークショップの経験の有無に関わらず積極的に子どもにアプローチし、音楽を一緒に作ろうという姿勢が見られた。



音楽的に自分の専攻を生かしつつ子どもに創作の余地を残す、アイデアに行き詰ってしまった時にチームメンバーにサポートを求める、立ち止まってじっくり考えてみるなど、講座中に学んだ子どもとの関わり方が反映されていた。少人数でのグループワークの後、集大成として保護者も交えての発表会が行われた。

発表会といっても改まったものではなく、創作の延長線上であり、作りながら演奏して行く性格のものであった。対話のグループでは、ワークショップ開始時点で硬くなっていた女の子が、ジャンベを自由に鳴らし、それに応答してダンス専攻の参加者が身体を動かす様子に笑顔を浮かべるシーンが印象的であった。最終的には全てのグループの音楽を組み合わせ、「ジャングルにいるレタス・玉ねぎ・マグロ・ごはん・パンが好きなおさぎ」というユニークな内容の7分間の楽曲ができ上がった。



4 日目：ワークショップの振り返り

3日目のワークショップについての振り返りから始まった。何が楽しかったか、うまくできたこと、難しかったこと、他のメンバーから学んだことなどを話し合った。また、もしまた同じワークショップを実施するなら変えたいところと変えたくないところはどこかを話し合い、次回への課題を見出した。

参加者の経験値が異なることから、講師は他のメンバーと比べるのではなく、自分自身の成長を評価し、それぞれが今よりも少し挑戦しながら未来へ進んで欲しいというメッセージを送られた。

〈参加者のことば〉

・アイデアから生まれたリズムなど、ベースになるものから次々と加えていく形だったので、新たな創作方法を学ぶことができました。

（東京 / ピアノ / 2年）

・リスクやチャレンジを恐れないこと、無理をして別の自分を演じるのではなく、ありのままの自分でいて少し大きい自分になることなど、ワークショップ以外でも活かすことのできる精神を学びました。また、音楽のありかたや考え方など、音楽的にも精神的にも多くのことを学ぶことができました。

（東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 3年）

・子どもとどのように音楽を作っていくのか、どのように音楽を引き出すか、学びました。また、要素の組み合わせ方や1つの要素を変形させて音楽を作ることを体験できてよかったです。

（東京 / ヴァイオリン / 3年）

・たくさんのことを学ばせていただきました。特に、どのようなアイデアをピックアップして発展させていけばよいかを体験できたことがとても勉強になりました。

（一般参加者）

・一つのことから多くのアイデアを引き出していくこと、教えるのではなく一緒につくること。参加者の表現や興味を全体の調和、共有に十分活かせるよう、方法を見出し即時に提案する力が必要だということ学びました。（東京音楽大学卒業生）

・フラットな関係性の良さ、それを作っていくプロセス、枠組みを作っていく方法、音楽に対する障

壁を取り除くとどうなるかということ——たくさん学びました。
(一般参加者)

・今までよりもあえて一步引いて、周りをみたり、ほかの人がリードするシーンを作ることで新しい視点を知ることができた。(神戸女学院卒業生)

・1日しか参加することができませんでしたが、また違う引き出しや、ワークショップの作り方を学びました。
(東京/ピアノ/2年)

・即興演奏や、人前にでることが苦手でしたが、以前より少し抵抗がなくなり、またチャレンジしたいと思いました。また、積極的に意見を出したいと思いました。
(東京/ミュージック・リベラルアーツ/3年)

・ワークショップの実践では、全てを受け入れ(子どもからのアイデア)音楽をつくるということに挑戦でき、その心構えや受け入れ方を基礎的に学ぶことができました。
(一般参加者)

・自然にある素材からイメージをふくらませ、創造していく過程にも音楽を共有できることが学べたので、音楽以外のものにも興味を持って探そうと思いました。
(東京音楽大学卒業生)

・リードをする際にわかりやすく大きくアクションしたり表情で伝えることが大切だと気付きました。また本番の日には、誰一人取り残さずに、参加者一人一人が主人公になれる音楽作りの姿勢がとても勉強になりました。自分もそのような姿を目指したいです。
(東京/ミュージック・リベラルアーツ/3年)

・いろいろなコラボレーションの仕方、思いの伝え方があることを学びました。(東京音大卒業生)

・参加者が興味をもっていること、みなと共有しようとしていることなどを全体に結びつける即時のファシリテートの方法が体験できたので、少ない量からチャレンジしてみます。
(東京音楽大学卒業生)

・色々な目的をもって参加していること。多様な人々がそれぞれの意図を曲げずに楽しみ協働で

きることということに気づいた。(一般参加者)

・人との関わり方、ほかの人の考えていることに耳を傾け、自分の思いと化学反応させていくことを学びました。さらに視野を広げていきたいと思えます。
(東京音大卒業生)

・普段のレッスンや学校での指導でも、もっと生徒の引き出しを開け、広げていきたい。
(一般参加者)

・音楽を音だけでなく、空間、コンセプト、関係性といったより広い要素を含むものとして考えることで、音楽を表現する形式、その味わいを広げていきたい。
(一般参加者)

「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第10回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

令和元年（平成31年）度 実習報告（神戸女学院大学）

事業名称	「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第10回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
音楽作り指導者	デッタ・ダンフォード、ナターシャ・ジエラジンスキ (英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生)
企画・司会	津上 智実（神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時・期間	2019年9月17日（火）13:00～16:00 9月18日（水）13:00～16:00 9月19日（木）13:00～16:00 9月20日（金）13:00～16:00 9月21日（土）8:45～16:00 ※「子どものための音楽作りワークショップ」は最終日のみ
実施場所	神戸女学院大学 音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生（卒業生含む） は無料 一般の参加者（上記以外）：5,000円（全日参加） 21日子ども参加：無料
主催・協力など	主催：神戸女学院大学音楽学部 協力：英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学
参加者数	9月17、18日 神戸女学院生 13名（1年生9名、3年生2名、4年生2名） 卒業生 2名 9月19日 神戸女学院生 13名（1年生8名、2年生1名、3年生2名） 卒業生 3名 9月20日 神戸女学院生 13名（1年生10名、3年生1名、4年生2名） 9月21日 神戸女学院生 13名（1年生10名、3年生1名、4年生2名） 卒業生 1名 子ども 23名（小1年生11名、小2年生6名、小3年生2名、小4年生3名、 小5年生1名）

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通して、誰もが持っているクリエイティブなアイデアや能力を引き出し、コミュニケーション能力やリーダーシップなど、これから社会に飛び立つ学生にとって必要な力を実践的に身につけることである。

そのため、2019年9月17日からの5日間、英国ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースの修

了生であり、世界で活躍するフルーティストで作曲家のデッタ・ダンフォードとチェリストで作曲家のナターシャ・ジエラジンスキを講師として日本に招聘し、本学音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ（Creative Music Workshop）特別研修を実施した。

9月17日、18日、19日、20日の各3時間は学生対象の研修を行い、最終日の9月21日には学

生の学びの仕上げとして、子どもたちを交えた形で、第10回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した（後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施）。

1日目は全員で円になり、自己紹介をかねて、それぞれの名前をコール・アンド・レスポンスするというアイスブレイクからスタートした。その後は部屋の中を自由に歩き回り、合図と同時に別のアクションをとる、などをした。全員に白い1枚の紙が配られ、破る・ちぎる・折るのみを用いてそれぞれが作品を作った。これを基に、2人もしくは3人で組をつくり、他の人の作品からインスピレーションを受けて、即興演奏を行った。



2日目は、円になって講師や学生の誰かの動きを真似したり、ボディパーカッションのみでの即興的なリズム合奏によるアイスブレイクを行った。講師から「私があなたを支えることは重いことじゃない、支えないと彼女は落ちてしまうから」といった意味の英語の歌を教わり、支えあうことの大切さを歌で表現した。その後、専攻楽器や小物打楽器を手に、即興的な合奏を行った。指揮者役を何



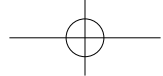
人かの学生が体験し、それぞれの個性的な音楽が生まれた。

後半ではピアノやカホン、トロンボーンなどのベース・セクション、小物楽器によるリズム・セクション、木管楽器や弦楽器によるメロディ・セクションに分かれ、各セクションでモチーフを生み出し、さらに合奏が発展していった。

3日目はアイスブレイクのあと、2日目のセクションごとにわかれて、前日に出来上がったモチーフをさらに整理、発展させた。それぞれのモチーフを披露し、モチーフの合体や変化などをさせていくうちに、「グローヴ」、「パイレーツ」、「ケイヴ」と名付けられたテーマが出来上がった。この頃には、初日の緊張した雰囲気はなくなり、学年を超えて学生同士がコミュニケーションをとる様子が見られた。控えめな学生が即興合奏の指揮役に挑戦するなど、学生たちの積極性を感じられるようになった。



4日目は手首や足首を動かすことから始まり、様々な学生の動きや声などを真似しながら、体をほぐしたり、リズム遊びをするなど、さまざまな種類のアイスブレイクを行った。その後、子どもたちを迎えた時に、誰がどのような役割を持って動くかについてのミーティングを行った。アイスブレイクを考え、リードする役の学生を決めた後、さらに「ベース」、「リズムと歌」、「メロディ楽器」の3グループに分かれ、グループごとに音楽を作るという方針を決めた。実際に学生役と子ども役に分かれ、アイスブレイク、そして「ジャングル」「海」「宇宙」をテーマにそれぞれグループワークのリハーサルを行った。デッタとナターシャからは、どのグループも素晴らしいというコメントと、さらに良くするためのアドバイスを受け、学生たちの自信や向上心にも繋がったようだった。



いよいよ最終日の9月21日は、小学校1年生から5年生までの子ども23名を迎えて、第10回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」が開催された。子どもたちは、本学で用意した小物楽器や、持参したヴァイオリンやリコーダーを持ち、音楽作りに参加した。初めての参加で、家族と離れて緊張している様子の子もや、友達同士で参加しているが、慣れない空間にキョロキョロしている子どもなどがいたため、紙風船を使って学生が遊びに誘うなどをしていった。

最初のアイスブレイクでは、「お互いの名前を呼びあおう」ということで、子どもと学生がいくつかのグループに分かれて小さい円を作り、それぞれが自分の名前に簡単な音や動きをつけ、コールアンドレスポンスを行った。子どもたちはまだ緊張している様子で、名前を言えない子もちらほらといた。

アイスブレイク中に別の動きをしたりと、周りの気を引こうとする子どもがいたため、デッタとナターシャがアイスブレイクのサポートに入ったりと、少々予定外の始まりとなった。



アイスブレイク後、少しずつ緊張感が解けてきたころ、3日目に作ったパイレーツのリズムを子

どもたちに聴いてもらい、どのようなイメージか、何が出てくるかなどのアイデアを募り、それを基にさらに発展させ、ひとつのモチーフの完成となった。

次に、子どもを3グループに分け、前日までに決めていた「ベース」、「リズムと歌」、「メロディ楽器」それぞれのグループワークを行った。

グループワークのあと、再び全員が集まり、それぞれのグループでどのような音楽が出来上がったかシェアを行い、さらにこれらをどのように組み合わせると演奏すればより良いものになるかを話し合った。そしてひとつの大きな曲が完成し、『エイリアンの旅行』と名付けられたこの作品は、子どもたちのアイデアがたくさん詰まった、まったく新しい音楽となった。



ワークショップの締めくくりとして、保護者が客席で見守る中、作品発表が行われた。家族が見ている前で演奏は、リハーサルの時よりもずっと生き生きしており、練習の成果以上のものを披露することができて、大きな拍手があった。

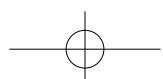
最後に、今日のワークショップについて、受講生と子どもたちで振り返りの交流が行われた。子どもたちはそれぞれ、紙に絵や文章で楽しかったことや印象に残ったことを書き記した。

子どもたちが帰った後、受講生と講師は、最終日および特別研修全体についての反省会を行い、感想を発表したり、意見の交換が行われた。

なお、本学大学院通訳コースの方々が逐次通訳を行い、講師と学生の相互理解を助けてくれたことを記して感謝する。

<参加者のことば>

- ・1回目の目標設定で、私は「音楽」と感じないウォーミングアップが知りたいと思いました。その後、





受講する中で自分が前に立ってリードする機会もあり、知っているというだけでは体を動かすことも、伝えることも上手くできないと分かって、私自身が考えて「こうしたい」と思ったことを用いて、リードできることが目標になりました。ワークショップを終えて、リードに必要なことは、その時々によって全く違うと感じました。また、自分が前に立ってリードしていても、他の全員の協力があってこそ、その場が作られるのだと改めて気づき、一方通行でない関係を体感できたのが一番うれしかったです。(オルガン / 1年)

- ・まず一番に言えることは、このワークショップに参加できて本当に良かったと強く思っています。「音楽作り」という言葉に不安を抱いていましたが、参加してみると音楽本来の本質、つまり「音を楽しむ」ということを体感できました。英語での会話にも全く自信がありませんでしたが、自分なりに頑張っ理解し、伝えたいという思いが強くなり、今後の意欲につながりました。心の内をオープンに素直になれました。本当に人生でトップの経験になりました。(ピアノ / 1年)
- ・昨年の克服をしようと思ったけれど、まだ辛かった。でもリズムの楽しさは前より感じるようになったし、勇気を持つ努力はしました。作曲マイナーでの経験も含めて、私は新しく音を生み出すことは得意ではないことに最近気づいたが、それでも他の人や楽器と一緒にアンサンブルするのはとても楽しいし、生まれてきた音を組み合わせたりするのは、できるかもしれないと思いました。(ヴァイオリン / 3年)
- ・私は演奏家ではないので、普段作曲をしている私

からすると貴重な時間でした。たくさんの音を別々に、少しずつ聴くことができたからです。そして最終日に突然指揮をさせて頂くことになり、皆の音を中心に聴くこと、皆を引っ張ることができたのも、とても大きな経験になりました。

(ミュージック・クリエーション / 1年)

- ・音楽が苦手だという人を知っています。そんな人に知識や技術を伝えるだけでは、音楽の良さは伝わらないように思います。たとえ苦手だと感じていても、今回のワークショップのように、周りと一緒に行動しながら、楽しみながら、音楽は表現のツールの1つでもあると知ってほしいと思いました。(オルガン / 1年)
- ・子ども達のキラキラした目がとても印象的でした。会場が一体になった瞬間が最高に興奮しました。(保護者)
- ・音楽といえば楽器を使ってというイメージを持ちますが、声を出したり口で音を作り出す(効果音のように)、またイメージを持って音を考えることにより、体をリズムに合わせて音を演じた気持ちになれて勉強になりました。TVを見ても、作曲や効果音を作り出すことの楽しさを子どもは知れたのではないかと思います。日頃お稽古事の一つの楽器を使いますが、これからの学びにも今日の体験が活かされると思います。ありがとうございました。(保護者)
- ・ホールに入った瞬間「楽しかったんだな」と分かる表情をしていました。初めての参加で親は少し心配でしたが、本人はとても楽しかったようです。(保護者)



音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」@大宮

令和元年（平成31年）度 実習報告（東京音楽大学）

事業名称	音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」
実施日時	2019年6月22日（土）9：50～11：40
実施場所	埼玉県大宮市立大宮東小学校
主催	大宮東小学校 土曜チャレンジスクール（PTA 組織）
対象	小学3年生 8名、4年生 13名、5年生 6名、6年生 9名 合計36名

〈事業概要〉

大宮東小学校の土曜チャレンジスクールという放課後活動（PTA 主催）の一環として、3年生以上の児童を対象にワークショップを実施した。ワークショップリーダーは、ミュージック・コミュニケーション講座の昨年度受講生2名と卒業生3名、教員1名の計6名で、「4枚のカード」というタイトルの下に音楽創作を行った。

■導入

- ・身体ほぐし（ボディーパーカッション）
- ・歌（カノン）の練習

■カードでリズム創作

- ・4グループに分かれ、グループごとに、リズムを表す絵が描かれた4枚のカードの並べ方を考える
- ・それを楽譜に見立てて、そのリズムを身体で表現する

■サウンドスケープ

- ・様々な楽器を鳴らしてみ、お気に入りの楽器を選ぶ
- ・合図に合わせていくつかの鳴らし方で楽器を演奏したり、演奏を止めたりすることを練習する

■音楽創作

グループごとに「誰が」「どこで」「何をして」「どうなった」を表すカードを1枚引き、その内容に合わせた音楽を創作する。楽器を用いても、歌にしても、ボディパーカッションを加えてもよい。

その後、各グループで作った音楽を演奏し、その内容を当ててもらおう。今回は、「赤ずきんちゃんが」「電車の中で」「ダンスを踊って」「プロポーズした」というカードが引かれた。お互いに他のグループが引いたカードの内容は知らないの、まったく違うタイプの音楽ができた。次に、4つの音楽をどの順番でどのようにつなげて演奏するかを皆で相談した。さらにストーリーに新たな解釈を加え、前半で創作したリズムによるボディパーカッションを組み合わせることにより、大きな楽曲に仕上げ演奏した。

＜リーダーを務めた昨年度受講生の声＞

創作に意欲的に参加してくれた子が多く、コミュニケーションがうまく取れました。その一方で、声掛けする際の言葉づかいに気をつけなければならないと思いました。一方通行のワークショップにならないよう、どこまで教えて、どこから参加者に委ねるか、その境目が難しいと感じました。



ワークショップの様子

西武池袋本店 音楽づくり体験ワークショップ

令和元年（平成31年）度 実習報告（東京音楽大学）

事業名称	「誰でもみんなアーティスト」音楽づくり体験ワークショップ
実施日時	第1回：2019年5月4日（土・祝）「音でつくる物語」 第2回：2019年6月1日（土）「音でえがく風景」 第3回：2019年9月7日（土）「音でたのしむクッキング」 第4回：2019年10月5日（土）「名曲のひみつ」 第5回：2019年11月2日（土）「誰でもつくれる音の世界」 〈音楽ワークショップ〉10:30～12:00 〈発表会〉12:30～13:00
実施場所	西武池袋本店 別館8階＝池袋コミュニティ・カレッジ
主催・協力など	主催：西武池袋本店 共催：東京音楽大学 後援：豊島区
対象	豊島区在住の小学3年生までの子ども（定員15名・参加費無料）

〈事業概要〉

「地域のコミュニティ作り」と「子育て支援」を目指す西武池袋本店とのコラボレーションにより、定期的な音楽づくりワークショップを開催した。

ワークショップリーダーは、東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座を担当する武石・磯野・坂本の3名が中心となり、可能な範囲で講座を履修している学生や講座履修経験のある卒業生にも参加してもらい、チームのリードや子どもたちのサポートをアシストする立場でワークショップ実践の経験を積む機会とした。全5回のプログラムで、各回それぞれのテーマに沿った音楽創作を行う。ワークショップ後には、創作した作品を西武池袋本店屋上の野外ステージで発表し、ワークショップのあいだ外で待機していた保護者や一般客の前で演奏した。

屋上ステージでは、13時半と15時に東京音楽大学アクト・プロジェクトの企画・制作により、ワークショップで取り扱ったテーマに関連する内容のミニ・コンサートが行われた。午前中のワークショップと午後のミニ・コンサートのコンセプトに共通性を持たせることで、コンサートで演奏される楽曲をより身近に感じてもらうこと、また作曲家が作品を創作する際に考える過程には、ワークショップで小さな素材から音楽づくりをするプロセスと共通する部分があることを感じてもらうという趣旨によるものである。

全5回のワークショップでは、学校や地域の公共施設で実施するワークショップとは異なり、初めて出会う子どもたちが集う。また、すでにこのワークショップに参加した経験のあるリピーターと、初めてワークショップを体験する子どもが混

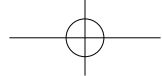
じって参加する。様々なタイプの子どもたちが初めて一堂に会する中で、ワークショップリーダーは短い時間で参加者の心を開き、何かしらの作品を作り上げる必要がある。しかしその過程において、すばやく合意形成できなかつたり、声の小さい子どもや反応の遅い子どもの意見を活かしきれなかつたりするという問題と常に向き合うこととなった。また保護者が参加していないワークショップの場においては、子どもの心を開き皆が一致して納得する時間を共有することに重点を置くのであるが、屋上ステージでの発表においては、音楽として聴き映えがするという必要でもある。音楽が出来上がるまでの過程にある学びや気づきを大切にしながらも、面白い音楽、芸術性の高い音楽であることもあきらめたくないというジレンマを抱えながら、5回のワークショップを行った。

終了後に保護者から戻ってきたアンケートで、多くの方が再度の参加を希望されたのはうれしいことであった。

【第1回】5月4日（土・祝）

音でつくる物語

子どもたちと行ってみたい国を考え、その国の音楽を創作した。「お菓子の国」「安全で規則正しい国」「お化けがいない国」「空を飛べる国」など、さまざまなアイデアを模造紙に書き出し、それを基にリズムや旋律、歌詞を作って音楽で表現した。午後のコンサートでドヴォルザークの《ユーモレスク》が演奏されることに関連づけ、その旋律をアレンジした歌をあらかじめ創作しておき、各グループの創作の間をつなぐ音楽とした。出来上がった短い作品を、子どもたちの言葉でつなぎ、



物語のように発表した。

【第2回】6月1日（土）

音でえがく風景

3枚の絵画を題材にし、そこからイメージされるものについて話し合い、それを基に音楽づくりを行った。題材として選んだ以下の絵には、物語をイメージしやすい具象画ばかりでなく、見る人の視点によって捉え方が変わる抽象画をもあえて含め、子どもたちの想像力に期待した。

〈題材にした作品〉

1. カンディンスキー「コンポジション IX」
2. ムンク「叫び」
3. 葛飾北斎「神奈川沖波裏」



子どもたちは、それぞれの絵の中の細かい部分の特徴を捉え、それを言葉に置き換えて音に映し出していったため、一般的に大人がムンクや北斎の絵に抱いているイメージとはまったく異なる音楽ができ上がった。本ワークショップに初回から続けて参加する子どもたちもいたため、リーダーの合図に従って開始したり、次の音型に移ったりするということが、よりスムーズにできるようになった。

【第3回】9月7日（土）

音でたのしむクッキング

料理をテーマに以下のようなワークを行い、それを基に各グループで創作を行った。

- ・調理時に発生する音をオノマトペ（ぐつぐつ、ジュージュ等）に表し、それをボディーパーカッションや楽器で奏してみる。
- ・料理名や素材の名前など、クッキングに関することばを組み合わせてリズムを創作する。
- ・料理に使う用具（なべ、まな板、ボウル、菜ばし、お玉、おろし金、泡だて器）を打楽器に見立て、

「おもちゃの兵隊のマーチ」（3分クッキングのテーマ曲）に合わせて自由にたたく。

ワークショップリーダーは事前に、子ども達全員で歌える歌「好きな食べ物、なんだろう？ みんなで楽しくクッキング」を創作・準備しておき、これを皮切りに各グループが創作した音楽を発表し、全体として一つの作品に仕上げた。調理器具を用いた即興リズム打ちには、客席の保護者も参加した。



【第4回】10月5日（土）

名曲のひみつ

ここでは、モーツァルトの《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》とグリーグ《ペール・ギュント》第1組曲より「山の魔王の宮殿にて」の2曲を取り上げ、名曲の特徴を体験的に感じさせる機会とした。



《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》は第1楽章の冒頭主題のリズムを①と②の二つに分けてボディーパーカッションを創作し、その応答を練習した後、初めて原曲のメロディーを合わせて演奏し、同じリズムであることに気づかせた。その後さらに、ヴァイオリンのトレモロのリズム③を加えて、原曲に合わせてボディーパーカッションができるようにした。

次に、ハロウィーンを控えている時期であることから、「おばけの音楽」を作ることを提案した。まずは楽器で曲作りを試みた後、おばけに関することばを幾つか挙げてもらい、それを歌詞として「山の魔王の宮殿にて」のテーマの冒頭部分からオリジナルの歌を創作した。

ワークショップの発表後、午後のコンサートでは《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》の演奏

があり、その時、客席にいたワークショップ参加児童がハッとした表情をしたことが印象的であった。

【第5回】11月2日(土)

誰でもつくれる音の世界

即興で作る音楽をテーマに、アドリブで生まれたリズムや動きを組み合わせて作品を創作した。

即興はお互いの音を聴きあうことから始まるため、自由に楽器を演奏しながら、少しずつ周りの音を聴き、合わせていく体験の時間を設けた。また、パ行とダ行だけで歌詞(パプペピ、ダダ等)を考え、それにメロディーを当てはめてみるなどの新たな創作の方法にも挑戦した。子どもたちは、いつもよりも自由度の高い中で活発に意見を出し合っていた。

発表の際には、小さな音楽単位を繰り返したり変化させたりすることによって、その場で即興することが可能であることを説明し、子どもたちが演奏したのと同じ低音の上で、リーダーがそれぞれ即興を行い、自由なセッションの雰囲気を味わった。

参加者の感想

・普段の授業では学生どうしで対象になりきってワークショップを学ぶのですが、西武のワークショップでは実際に小学生と一緒にワークショップをすることができ、大変貴重な経験でした。また、先生方の現場でのお姿もとても勉強になり、自分も「次はそうしてみよう」と思うことがたくさんありました。ワークショップでは、子ども達から出てきたアイデアや音楽に即座に反応したり、限られた時間の中で創作をしてまとめたり、などの即興が多く大変でした。ですが、回数を重ねるうちに慣れることができ、力も付いたと思います。また子ども達のアイデアはいつも新鮮で、毎回楽しい発見があり、とても楽しかったです。この体験が自信につながり、これからボランティア等で子どもと接する活動をする後押しとなりました。(ミュージック・リベラルアーツ/3年)

・「一人では行きたくない」と言っていた娘でしたが、いざ参加してみると「お友達できた!」と喜んでいました。コミュニティ作りにもいい機会でした。(保護者)

・初めて会った先生方、お兄さん、お姉さんと一緒に何でも挑戦してほしいという思いで参加させていただいたので、とても良い経験になったと思います。(保護者)

・作曲というと難しそうなイメージでしたが、子どもたちの感性を生かし、楽しく演奏できていました。短時間で一生懸命練習してやりとげた表情はとても誇らしげでした。このような体験を今後もさせたいと思います。(保護者)

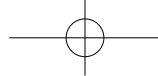
・音楽は難しくない、楽しいものだと言った娘に感じてもらえてよかったです。(保護者)

・短時間ですてきな演奏会に仕上げてください、本当にありがとうございました。チームワークが素晴らしいですね。子どもたちをまとめる力に脱帽!(保護者)

・終わった後の笑顔が「やりきった」感じでよかったです。(保護者)



ワークショップの様子



おわりに

平成 21 年度に始動した共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション：音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も、11 年目を充実した形で終えることができました。文部科学省の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択された折、「3 年間の補助期間のみの連携ではなく 10 年は継続するように」との要求があり、本当にそんなに長く続けることができるのだろうかと不安に思ったものでしたが、毎年の実践をコツコツと積み重ねる内に 10 年を超えました。これも関係者の皆様のご理解とご協力のお蔭と御礼申し上げます。

今年度のワークショップ特別研修に招聘したデッタ・ダンフォードは、12 年前に初めて会った時はとても内気な大学院生でしたが、その後、拠点のロンドンはもちろん、世界各地での経験を積み重ねて大きく成長し、今では優れた音楽作りリーダーとして伸び伸びと力を発揮しています。相棒のナターシャ・ジエラジンスキも同様ですが、それぞれ家庭を持って子どもを産みながらしっかりと仕事を続けている姿は、音楽を学ぶ学生たちによき手本として希望と力を与えてくれるものと思います。

この春、日本も世界も新型コロナ・ウイルスの流行で、多くの行事が中止されて様々な影響が出ています。人も物も情報も世界規模で急速に回る時代だからこそ、コミュニケーションと教育の重要性を改めて考える必要があると思います。今後も引き続き「音楽の力を伝えるスキルをもった学生を育てる」という理念のもと、さらなる向上に努めていきたいと存じます。末筆ながら、今年度もさまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

2020（令和 2）年 3 月

津上智実（神戸女学院大学・教授）

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

令和元年（平成 31 年）度 活動報告書

令和 2 年 3 月発行

発行者 東京音楽大学 連携センター
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5 B1005
Tel : 03-3982-3186 (内線 2005)
Mail : music.communication.tcm@gmail.com

編集 神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム
東京音楽大学 連携センター

表紙・本文デザイン 上條浩史

